



積み上げられた米袋



プレゼント用のかわいいパッケージ入りも



▲店内には全国から届いた個性豊かなお米が並ぶ

自分の目で確かめること

時間を見つけては、その足で産地に向かい、生産者の声を聴き、その目で水田を見つめる敏広さん。

その一つに、福島という土地がある。東日本大震災後、様々な憶測が飛びかい、福島産のお米を扱うものが居なくなった。

原発から200キロ以上離れた地でも基準値を上回るセシウム検出の知らせ。現地農家は瀕死の状態。

何が本当で、現地はどんな状況に陥っているのか。敏広さんは、2人の仲間とともに大阪から750キロ離れた地に向かう。

「みんな本当に元気がなかった。何とかしたいと思った」厳しい検査をクリア

したお米1トンをワンボックスカーに積み込む。

「俺たちが居る。元気出して」それだけを伝えたかった。

チャレンジし続ける姿

随所に商売へのこだわりを持ち、新たなチャレンジを続ける敏広さん。

数年前、米粉がブームを巻き起こした時、「これからは米粉の時代や!」と一台15万円の石臼を即時購入し、米粉パン販売に挑戦。

しかし、石臼でひいた米粉ではパンが作れないと判明し、お父さんには今も内緒で、押し入れの奥にひっそりと身を隠す石臼。

「あの時は勢いがあったね。でもあの事件以来ケチになったかも(笑)」

親切第一

精米番長では、鮮度を重視するため、1キロから3キロ程度をその場で精米し販売する。

お客さんは、おのずと店を訪れる回数が増える。そして会話も増える。

「ここ、1日に3、4回通るねん。ここ来たら、店長と喋れて、私若返るねん。(笑)」

店内では、傍らにそっと置かれたイスに腰かけ、敏広さんと談笑するお客さんの姿。

「いつもの3キロちょうだい」「のど乾いたやろ、イチゴ食べるか」

せわしない暮らしの中の、ほんのひと時の憩い。お客さんを愛し、お客さんに愛され、今日もお店にはたくさんの笑顔が広がる。

夢

若い感性で時代を駆け抜ける敏広さん、かなえない夢もたくさんある。

「若手が集まって、話をして、もっとこの業界を盛り上げたい」

「色んな分野の人とコラボして、おもしろいことにチャレンジしたい」

夢を語る敏広さんの瞳が、希望の光で満ち溢れる。

頑張っ! 番長。そして、いつも元気をありがとう。



▲店内にはいつも笑い声が響く

【よどじんコーナー】

よどじんコーナーでは、静かに流れる人々の暮らし、何気ない風景、そして人の心に光をあて、みなさまの元にお届けします。